

日本文学

2

特集・古代文学研究
——この半世紀を問う

2021年 VOL. 70
日本文学協会編集・刊行

特集・古代文学研究——この半世紀を問う

黄泉国の五十年 ——読みは深められたか——	三浦佑之・2
万葉歌の内と外と ——大宰府文学圏の点と線——	上野誠・12
古代物語研究の「これまで」と「今、何を」 ——踏み損ねた曲り角はどこか——	廣田收・22
『源氏物語』のファクターX ——コロナ禍のなかで考える——	安藤徹・31
子午線 寛と晶子のバリ・渡欧から一一〇周年 読む 『好色一代男』の章題を読む	神野藤昭夫・42 紅林健志・44
書評 久保朝孝著 『紫式部日記論』	池田節子・50
鈴木千恵子著 『杞憂に終わる連句入門』	永田英理・52
清水麻利子著 『片山廣子短歌研究』 茶川龍之介との「うた」の道行	伊藤一郎・54
九里順子著 『詩人・木下夕爾』	下岡友加・56
今月号掲載の論文要旨	60
2・3月号会案内	49
新刊紹介	41・48・58

特集

古代文学研究

——この半世紀を問う

二〇世紀末を経て二一世紀が到来し、約三〇年続いた「平成」も終わりを迎え、新年号が始まった。この間に古代文学研究は、何を為してきただろうか。

沖繩返還に伴い一九七〇年代から展開され始めた文学発生論、一九八〇年代に盛んになる様式論、一九九〇年代、二〇〇〇年代の世界の混乱期に登場した「東アジア」という視点に立つ文学研究やテキスト論など、歴史社会の流れは古代文学研究の在り方にも大きな影響を与えてきた。つまり古代文学研究は、その時その時の社会の在り方に応じた「時代の関心」を踏まえ、それぞれの立場から古典文学に迫る方法を模索し、切磋琢磨を続けてきた。

『日本文学』誌上では「古代文学研究の危機と可能性」（二〇〇二年五月号）、「古代文学研究の（方法）」（二〇一〇年五月号）と、古代文学研究はいかにあるべきかを模索してきたが、今あらためてこの半世紀の研究を振り返りたい。「古代」という現在からは最も隔たった、遠い時代の言葉で書かれた対象と向き合い、対話しようとする研究、現代の言葉とつながってはいるが徹底的に異なっている「他者」を相手とする研究であればこそ、現在に向けて提言できることがあるはずである。

「他者」と向き合うための専門性を突き詰めたうえで語ることもできる古代文学研究の面白さとその意味は何か。それは正しい研究水準の把握のうえに成り立つはずである。それは時に厳しい批判をももたらすかも知れないが、『日本文学』は発刊当初から、文学研究とはどうあるべきかを最も先鋭的に問いかけてきた雑誌である。この半世紀、古代文学研究は何を為してきたのか、忌憚なく問い直し、今後を見定める原稿をお寄せ頂いた。

黄泉国の五十年

——読みは深められたか——

五十年というのと、わたしが古事記に向き合ってきた時間とほぼ重なる。それだけの時間を費やせば古事記に関する知見は深まり、研究史のなかに刻まれるべき新見の一つや二つあつて当然だ。わたしだけではない、研究に携わっている者なら、だれもがそう思っているだろう。しかし、その新見によつて古事記(作品)の読みは深められたかと問うてみると、忸怩たる思いを禁じえない。

その五十年のなかでそれなりの紆余曲折を経た今、わたしは古事記「序」は後付けであり、古事記は律令国家とは離れたところに置かれた史書(神史と呼んでもいいような)だと考えるに至つた。わたしにとつては五十年の研究史のなかの到達点であるが、古事記の存在そのものを揺るがしかねない「序」後付け説がそうそうたやすく受け入れられるとは考えにくく、王道を行くと自負する研究者からすれば異端の僻説以外の何物でもない。

一方、明白に読み間違いといふしかない通説がいつまでも大手を振つて大通りをまかり歩いているのを見ると、言い出した者に対してではなく、その誤りにいつまでも気づかない追従者たちに怒りを感じて叱咤したくなる。主張した説が間違っていることは当然あ

三 浦 佑 之

り、誤りに気づけば訂正する。それだけのことだが、権威を楯にした同調者が多いといつまでも定説として通用してしまう。そのあたりの問題を、五十年にわたる研究史と研究方法を踏まえながら考えてみたい。取りあげるのは、「黄泉比良坂之坂本」に関する読みの問題である。

黄泉比良坂の坂本

火の神カゲツチ(迦具土神)を生んで神避つたイザナミ(伊耶那美命)を連れもどそうとして黄泉国に行つたイザナキ(伊耶那岐命)は、外で待つように言われた約束を破つて殿の内を横たわるイザナミの腐爛した姿を覗き見てしまい、畏れて逃げ出す。怒つたイザナミは、ヨモツシコメ(予母都志許売)に命じてイザナキを追わせ、失敗すると次には八はしらのイカツチ(八雷神)に千五百の黄泉軍を添えて追わせる。それに続く場面は次のようになっている。

そこで、(イザナキは)腰に佩いた十拳の剣を抜いて、後ろ手で剣を振り振りしながら逃げてきた。(イカツチどもは)なおも追つて黄泉比良坂の坂本に到つた時、(イザナキは)その坂本に在つた

桃子三箇を取り、待ち撃つとこととに攻め返した。

(尔、拔所御佩之十拳劍而、於後手布伎都々逃來。猶追到黄泉比良坂之坂本時、取在其坂本桃子三箇、待撃者悉攻返也)

主語を補つて訳したが、のちに問題となる「坂本」の解釈に影響する本文に異同があるので、まずはその点について確認しておく。引用した原文の末尾を真福寺本に従つて「攻返也(攻め返しき)」と解したが、「攻」は「坂」(兼永筆本、寛永版本)、「迹」(道祥本、鼈頭古事記、古事記伝)ともあるために(校本古事記)四七頁、「坂返りき/坂を返りき/坂より返りき」「逃げ返りき」など、現行本文でもいくつもの訓が試みられており、一定していない。そのあたりの読解に関しては西條勉『古事記と王家の系譜学』に詳細に論じられている(七二―七四頁)。わたしの今回の試訓「攻め返しき」は倉野憲司『古事記全註釈』第二巻によつた。「言語訳 古事記」の現代語など今までは、同じく倉野憲司『日本古典文学大系 古事記』の「逃(逃げ返りき)」に基づいて訳していたが、原文「迹」は「意」によつて改めた疑いがつよく、古事記ではカヘルには「還」の字を宛てるのが原則だとみなす西條の指摘を踏まえて、真福寺本「攻」にもどして訳した。

この場面に登場する「坂本」という語は、ある一本の論文が出るまではまったく問題になっていなかった。辞書的にも、坂本は坂の下、坂の上り口としか解釈のしようがない語で異説が生じる隙などなかったからである。ところが、「坂本」が坂の下でなければならなかったために、黄泉国の位置が疑われることになってしまった。

そのきっかけは、倫理学者である佐藤正英が一九八二年に発表した短い論文「黄泉国の在りか」だった。先に紹介した「坂本」での

出来ごとと、それに続くイザナミの追跡による「事戸度し」の場面を、佐藤は次のように解釈したのである。

黄泉国を地下にある他界とみなす通説では、黄泉比良坂は、いうまでもなく地下へ向つて下る坂でなければならぬ(武田祐吉校注『古事記』)。黄泉比良坂が地下へ向つて下つているとすると、黄泉比良坂は坂上で俗世に接していることになる。イザナキの命は、黄泉比良坂の麓でイザナミの命に「事戸を度」して後、黄泉比良坂を坂上までのぼつて俗世に戻ってきたということになる。すると、黄泉比良坂は「坂本」において黄泉国に接しているものの、そこに境界たる「千引きの石」が置かれた以上、黄泉比良坂それ自体は俗世の側に属することになりはしないか。それは、神話的想像力の軌跡に反するのみならず、黄泉比良坂を黄泉国に属すると解している通説自身の立場にとつても、明らかな矛盾ではなからうか。(略)

神話的想像力の軌跡に従うかぎり、黄泉比良坂は、俗世の側からみて上へ向つてのぼっている坂として語られているとみられる。いかえれば、イザナキの命は、黄泉比良坂を逃げ下つてきて、その麓にまで辿りつき、そこで「事戸を度」したのである。つまり、黄泉比良坂は、上へ向つてのぼっている坂、いわゆる山坂として表象せられているのではなからうか。

佐藤の読みは、「神話的想像力」の些細な読み誤りから発しているとみるべきなのだが、そのことを指摘する前に、古事記に語られる「事戸度し」の場面を確認しておきたい。先の「攻返也」に続けて、イザナキは桃の実に感謝し、葦原中国に生きる命ある青人草(宇都志伎青人草=人間)が病いに苦しんだ時に助けてほしいと言ひ、オホカムヅミ(意富加牟豆美命)の名を授けたと記したあと、

次のように話は続く。

しまいに、その妹イザナミが自ら追いかけてきた。そこで、(イザナキは)千引の石をその黄泉比良坂に引き塞ぎ、その石を中に置いて、それぞれ向き立ちて、事戸を度す時に、イザナミが言うことには、

(最後、其妹伊耶那美命、身自追来焉。尔、千引石引塞其黄泉比良坂、其石置中、各对立面、度事戸之時、伊耶那美命言)(略)

佐藤の解釈に従うと、上のほうにある黄泉国から追手の追跡をかわして黄泉比良坂を逃げ下り、坂本に生えていた桃の助けで二番目の追手を攻め返したあと(追手は来た坂をもどった(坂を返りき)と佐藤は訓む)、イザナキは坂のふもとでそのまま待機してイザナミが追いかけて来るのを待っていたように読めてしまう。が、そんな悠長なことをしているのか。

逃竄譚というのは、世界中の神話や伝承における冒険物語のなかでもっとも普遍的なモチーフとして好まれ、今もさまざまに変容しながら小説やゲーム・映画を彩っている。その真骨頂は、追いつかれそうになりながらすんでのところ、追手から逃れるというスリル満点の展開にあるわけで、最後の強敵が到着するのを漫然と待っているというようなことは考えられない(油断するという語りくちなりありそうだが)。イザナキは、イカツチどもを追い払うとすぐに、次の追手を畏れて逃げたはずだ。何せ、逃竄譚は三回の繰り返しがお決まりの様式で、最後がもっとも強敵になるというのは誰でも知っている。

とすると、イザナキはどこへ逃げたか。当然、坂本から上のほうに逃げたのだ。上に向かつてしか道はないのだから。そして案の定、

ぐに比良坂を逃げ下りたという窮屈な解釈より、断然おもしろい逃竄譚になるではないか。

黄泉国のなかを逃げ回ったなどとはどこにも書かれていないという反論が出るかもしれない。しかし、そのような反論は、逃竄譚の様式がわかっているから出てくるのであり、神話のおもしろさを生み出す語りとはいかなるものかという「神話の想像力」が欠落している。佐藤は、「神話における神話の想像力の軌跡は、神話の語りくちにおいて現われ」るものであるのに、「われわれは、神話を読んでいるつもりでつい語りくちを無視してしまいがち」だと述べる。その通りと同意するが、佐藤の「坂本」に関する読みについて言えば、神話の想像力における神話の語りくちを理解していないと批判せざるをえない。

黄泉比良坂の坂本、その後

黄泉国が地下にある死の世界であるというのは、本居宣長『古事記伝』以来の通説としてあった。ただ、黄泉国がいかなる世界として神話的に存在し、黄泉比良坂を通路として共有する根堅州国(根国)との関係はどうなっているかなどについてはさまざまに議論が交わされてきた。その代表として一九七一年に雑誌『文学』十一月号に発表された西郷信綱「黄泉の国と根の国」を取りあげると、西郷は、「両者は一体で出入口も同じだけれど、必ずしも同義反復ではない。黄泉の国と根の国とは、地下という一つの世界の二つの側面、一つのもの二つの違ったあらわれである」(「古代人と夢」一二八頁)とみなし、黄泉比良坂というのは「普通のたんなる山坂ではなく、地下へと通じる洞窟を暗示している」(一二四頁)と考え

怒りに震えて追いかけてきたイザナミに追いつかれそうになったために、「其黄泉比良坂」の途中、あるいは坂の上に千引の石を引き塞いでイザナミと向き立ち、事戸(別れのことば)を交わすことになったのである。本文に「千引石、引塞其黄泉比良坂」とある通り、石を置いたのはあくまでも「黄泉比良坂」であって、佐藤のいう「坂本」ではない。

そもそも、佐藤は、「イザナキの命は、黄泉比良坂を逃げ下ってきて」と述べているが、どこにも坂を逃げ下ったなどとは書かれていない。「抜所御佩之十拳剣而、於後手布伎都々逃来。猶追到黄泉比良坂之坂本時」とあるばかりだ。無理をして読めば坂を逃げて来たとして理解できないわけではなからうが、そうすると、イザナキは「坂本」でイザナミが追いかけて来るのを待ち続けるという間延びした解釈をしなければならなくなる。したがって、逃げて来たのは坂ではなく、黄泉国の領域とみたほうが断然いいということになる。

佐藤の解説によると、黄泉国というのは、イザナミの横たわっている殿と比良坂しか存在しないような印象を与えるが、そうではないはずだ。佐藤自身、倭語ヨミの語源がヤミ(闇)ではなくヤマ(山)に由来すると主張するなかで(ヤマの音訛がヨミとするのは音韻的にむずかしいと思う)、イザナミのいる殿の内は闇だが、「黄泉国それ自体は、やはり俗世とそれほど変らない明るさの世界」と述べているように、黄泉国を空間的に広がりのある世界と認識している。そう考えるならば、覗き見した殿から逃げ出したあと、広くて勝手のわからない黄泉国を、イザナミが遣わした追手に追われながら逃げ回り、ようやく、地上につながる黄泉比良坂の「坂本」に辿り着いたのだと、どうして読まなかったのだらう。そのほうが、殿からす

ていた。こうした認識は、一九六七年に刊行され、古事記研究を方法論の場に引き出した『古事記の世界』によって示された文化人類学的な認識に裏付けられた構造論のなかで把握された世界観であった。大和と出雲との東西の対立軸を基盤として、その出雲に担わされた死と暗黒につながる異界として黄泉国と根国を位置づけることで、西郷は、古事記神話のもつ王権的な構造を論理的に説明してみせたのである。

黄泉国と根国とを「一つの世界」とみなす認識は、当時もそれ以降も一般化していたわけではないが(後述)、黄泉国の位置を地下とみることに疑問をもつのはごく一部の研究者に限られていた。そのような状況のなかで異分野から忽然と出現した新見は、たんなる雑音でしかなく、古代文学研究の反応は鈍いものだった。ところがそこに神野志隆光『古事記の世界観』が登場し、葦原中国を黄泉比良坂の坂本にあるとみなす佐藤説を「明快な論理性」をもつとして支持を表明した。そして、その佐藤説をも修正しながら、葦原中国と黄泉国は「上下の世界関係」にあるのではなく、「同じ平面でかわる世界」であることを主張したのである(八四〜八九頁)。それによって、誤読から生じた「坂本」説は学界のなかに、斬新な新解釈として急浮上する。一九八六年のことであった。

『古事記の世界観』は、古事記の構造の全体像を把握しようとする点で画期をなすものと評価できるし、おそらく西郷信綱『古事記の世界』でなされた構造論的な認識を受け継ぐものといえるだろう。そしてその後、佐藤・神野志によって提起された「坂本」説が葦原中国と黄泉国との位置関係を、垂直から水平へと変える大きな力になっていくのだが、それを決定づけたのは、一九九七年の『新

編日本古典文学全集 古事記』の刊行であった(山口佳紀との共著だが、当該部分に関しては、神野志の立場が鮮明に表出されているとみてよからう。以下、新編全集と略す)。

爾くして、御佩かせる十拳の剣を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。(四七頁)

当該部分をこのように訓読した新編全集は、「坂本」を説明して、次のような頭注を置く。

「ひら坂」を下ってきたところをいうのであり、黄泉国が地下にあるとはいえないことが明らかである。葦原中国は坂を下ったこちらに、黄泉国は坂の向こうにあるのであり、同じ地上の世界と受け取られる。(四六頁)

佐藤が黄泉国と地上とを上下関係に置くのに対して、神野志はそれを留保し(『古事記の世界観』「あとがき」参照)、両者を水平的な関係で把握する。その上で、真福寺本古事記を底本とする新編全集が、「攻返也」を排して「坂返也」と校訂し、イザナキに桃の実を投げつけられた追手どもは、下ってきた黄泉比良坂を引き返したと解釈した。その上で、黄泉国について次のように述べる。

黄泉国については、地下世界とみるのが通説となっているが、「坂本」という表現からすれば、葦原中国と黄泉国とは同じ地上世界とされる。また黄泉国を死者の世界とみる通説も認めがたい。物語に即してみれば、黄泉国の伊邪那美神の力が及ぶことによって(二つ)の世界は岩によって隔てられるが、そうした関係は残る)、葦原中国の、神ならざる青人草は生き死にせねばならぬこととなったというのである。そうした世界関係を通じて、葦原中国の世界としての

成り立ちを語るわけである。(四八頁頭注)

佐藤がそうであったように、神野志もまたイザナキは黄泉比良坂を逃げ下って来たとして理解しているから、「坂本」を地上の側として解釈する。しかし、この場面をどのように読むべきではないことは、前述した通りである。どうやら神野志も、黄泉国には殿と坂しか存在しないと考えてしまったらしい。しかも両者を「同じ地上」に置こうとした神野志は「坂の向こう」に黄泉国を想定したために、イザナキは黄泉国から坂を上って頂上に出ると、反対側の坂を下って地上側の「坂本」に着いたというふうになり、書かれていない行間を読んだのである。しかし、その読解はいかにも苦しい。

加えて、引用した「また」以下の文章にも問題があつて、少なくとも、千引の石を挟んだ「事戸度し」にみられるイザナミは「生き死に」の力を發揮しておらず、イザナミが青人草の「死」を、イザナキが「生」をそれぞれ分担している。その点から言えば、イザナミがうしろはく黄泉国は死のみの世界と考えなければならぬ。

ただし、ここに語られているような死の世界としての黄泉国が、この列島に暮らした人びとが思い描いた死後に向かうべき死者の世界として存在したかという点と、わたしにはなほ疑問である。本題からはすこし外れるが、そもそも人が死後世界を思い浮かべる時、地の底にあつて真っ暗で不毛な闇の世界をイメージするというのは信じがたい。それよりは、根堅州国がそうであるような、再生をともなう世界を幻想するほうが死という現実をとらえやすいのではないかと思うからである。

黄泉国とは、葦原中国という青人草(人間)の生活する地上世界に対して、垂直的な上空に存在する天つ神の世界(高天原と対になわたし)の印象だが、今から十数年前まではだれも「坂本」(地上説を受け入れていたわけではない。たとえば二〇〇五年、佐藤正英「黄泉国の在りか」)に真っ向から向き合い、佐藤が主張する「坂本」(地上説を論破したのは西條勉であった。先に引いた『古事記と王家の系譜学』第三章「神話世界の成り立ち」において、西條は、古事記の「高天原」「葦原中国」「根之堅州国」「綿津見神之宮」を取りあげ、それら神話世界の構造を古事記という作品の問題として論じた。そのなかで、佐藤が提示した「坂本」説は、「坂返/逆返/攻返」にみられる異同等「本文に即して挙げた根柢はどれも問題」があり(七〇頁)、古事記本文では「イザナキが坂を上って地上に出たことは、きちんと示されている」と読めるところからも、「佐藤説は、古事記の文脈に照らして成り立ちそうにない」(七四頁)と断定した。

その詳細は、当該論文にあたってほしいが、説得力は十分である。佐藤説はもちろん、直接名指しされてはいないが、佐藤説に追随した神野志説も成り立たないのは明らかだ。それに対して二人が、あるいはその支持者がどのような反論をしているのか、寡聞にして承知しない。そうでありながら、二〇〇〇年以降になると、新編全集の力によって権威化された「坂本」説は研究者のあいだに蔓延し、通説として定着した。いったん受け入れられた影響力の強い研究者の発言はいつまでも生き延びる、それが学界の常態である。

わたし自身の立場を述べれば、黄泉国と根国とは別の世界であり、黄泉国は地下にある死の世界だという認識は古事記研究をはじめた当初から変わらない。その最初の発言は、古代文学会の一七七五年夏季セミナーでの口頭発表をまとめた「黄泉国と根国——死後

る世界として、観念化された地下なる死後世界だったのでないかと思われる。そしてそれは、北方系民族に共通する垂直的に構想された王権神話の世界観として考慮されなければならないだろうというのが、わたしの認識である。後述するつもりだが、水平的な世界に幻想された根堅州国が古層にある神話世界であるのに対して、垂直的な世界観は、後発の、先住列島人のあいだにはあまり浸透することのなかった観念とみなすところからわかる。

現在、原文と訓み下し文のほか、語釈や解説の付いた、一般読者も研究者も使える市販の古事記テキストは、ほぼ新編全集だけになってしまった。そのせいもあって、誤読から生じた黄泉国を地下ではないとする佐藤(神野志説は圧倒的な支持を得た。たとえば、最近出た多田一臣『古事記私解』をみると、「黄泉ひら坂の坂本に到りました時に、その坂本なる桃の子を三箇取らして、待ち撃ちたまひしかば、(黄泉軍などは)悉く坂を返りき」と訓読した上で、「素直に考えれば、「坂本」は坂の麓であり、しかもこの世界の側だろから、黄泉の国はこの世界の上に位置することになる」とし、新編全集の「坂本」の注をそっくり引用した上で、「なるほど、合理的な説明かもしれない」と支持を表明する(一、五七―五八頁)。

多くの研究者が、このようにして「黄泉国は地下ではない」説に傾いていく。しかし、どうしてそれも簡単に「黄泉比良坂の坂本」が「この世界の側だろうから」と言ってしまうのか。イザナキはどこを逃げ回っていたのか、逃竄譚とはいかなる様式をもつか、音声に由来する語りの迫真力はどのようにして保証されるのか。様式論や語り論を経てきた者にとっては、理解の及ばない複雑な読みと批判せざるをえない。

世界の構造——」であった。そこでわたしは、黄泉国は「再生を拒否した死の世界」としてある地下世界であり、「死と生の根源」としてある根国は「地下でもあり海中でもあり、またニライカナイの如き海上遥かな島でも」あると位置づけ、両者はまったく性格の異なる異界だと主張した。それは、今に至るも大きな修正を要しないと考えている。そうした立場から、黄泉国Ⅱ地上説にはまったく関心を払っていなかったのだが、近年では地下説は間違いでないかとの指摘を受けることがしばしばあり、放つてはおけなくなつて反論を試みてきた（直近の論では「出雲神話論」一七七—一八頁）。しかし、その程度では何らの影響力も与えられそうにないので、会員数の多い学会誌『日本文学』から依頼を受けたのをこれ幸いと、「黄泉比良坂之坂本」を取りあげた次第である。

古事記における神話世界の構造

わたしとは立場は違うが、神野志隆光も西條勉も、黄泉国を取りあげることで、作品としての古事記の構造として神話世界（異界）をとらえようとしているという点は、大いに強調して評価しなければならぬ。そして、いくつもある神話世界をどのようにとらえるかによつて、古事記に語られる神話の構造は把握できると考えるのはわたしも同様である。その時、神野志や西條は、完結した作品として、文字に統御された作品として古事記を考えようとする方向性を強くもっているのに対して、わたしは、語りを残存させ、ルーズなままに文字化されることになつた作品として古事記をとらえている。そのため、西條や神野志が古事記の作品論に向かうのに対して、わたしは古事記の古層へと向かおうとするところで、方向を大

きく異にしてしまふのだと思う。おそらくわたしは、発生論や様式論、そして語り論といった方法論のなかで古事記研究を模索し組み立ててきたために、文字に統御され完成されたテクストとして古事記を読むことができず、いつもどこかで、深みに潜入するための破綻や綻びを探してしまふ。

以下、黄泉国を中心とした神話世界が古事記のなかでどのように位置づけられ、古事記神話ほどのような構造をもつかについて、わたしの立場を明らかにしておきたい。

古事記には、葦原中国と呼ばれる青人草Ⅱ人間の暮らす地上世界を取り囲んで、いくつもの神話世界（異界）が存在する。高天原・黄泉国・根〔之〕堅州国・常世国・綿津見神之宮と呼ばれる世界である。そのなかで、高天原は天孫（天皇氏）の始祖がいます世界として天空に浮かんでおり、天の浮橋を介して葦原中国とつながっている。両者は明らかに垂直的な関係に置かれており、葦原中国という呼称は、高天原の側から地上をさす呼称として顕れる。一方、国つ神（地上の神々）の側は、自らのうしはく地上を葦原中国と呼ぶことはない。唯一、タケミカヅチ（建御雷神）に制圧されたタケミナカタ（建御名方神）が、「この葦原中国は、天つ神の御子のお言葉のままに、すべて差し出そう（此葦原中国者、随天神御子之命献）」と言ひ、それを承けてオホクニヌシ（大国主神）も、「わが子ども、二柱の神の申し上げたとおりに、われもまた背くまい。この葦原中国は、お言葉のとおりにごことく天つ神に奉ります（僕子等二神随白、僕之不違。此葦原中国者、随命既献也）」と言つて服属するのだが、その場面だけに葦原中国の呼称が用いられている。このことばは、天つ神の側に言わされているのであつて、国つ神の側の認識

にはない呼称が葦原中国である。

それに対して黄泉国は、葦原中国をあいだに置いて天空の高天原と対なる関係にあり、地下に位置する死の世界として存在する。それゆえに、黄泉国の神話のなかには一度だけが葦原中国という呼称が登場する。つまり、

高天原——葦原中国——黄泉国

という垂直的な三層構造は、ヤマト王権の神威を保証する神話世界として構想されているとみることができる。そのなかで黄泉国は、高天原の高貴性・永遠性を支えるための汚濁・闇黒性を担っているとみればよい。だからそこは観念的な世界であつて、ふつうの人が死んだら行く世界というような考え方はほとんどもっていないとみるべきだ。そもそも、人が死を意識し、死んだあとの世界を思い浮かべた時、黄泉国のような世界を想像したり、そこへ行きたいと思うことはないだろう。どうやら黄泉国という世界は、人びとのなかに浸透した民俗的な世界というよりは、観念化された王権神話の枠組みに支えられた垂直的な世界観のなかに存在するとみなすべきなのである（葦原中国については三浦「出雲神話論」四七—五八頁、参照）。

人が行きたいと願う死後の世界が古事記のなかにあるとすれば、オキナワのニライカナイに重ねることのできるような根堅州国（根国）だと思ふ。そこが黄泉国と違うのは、循環的な構造をもつ再生可能な世界だということである。もちろんそれは一回的に消滅する個体のことではなく、家族や共同体のなかに紛れてしまう存在である。そして、そこは水平線のかたに思い描かれた世界だ。ササノヲ（須佐之男命）がイザナキに対して「妣国、根堅州国に行きたい」と言つて哭いたのは、そのような世界であり、決してイザナミのい

る黄泉国ではない。そもそも、古事記のササノヲはイザナミの生んだ子ではなく、イザナキの鼻から生まれ落ちた子である。それを、根堅州国と黄泉国とを同一視したいためにイザナミを持ち出して説明しようとするのは間違っている（日本書紀は別）。ただし、古事記には、根堅州国から地上への出口を黄泉比良坂と呼んで黄泉国と根堅州国とを近づけようとする意図がはたらいっているのは確かだが、それは王権神話の側の作為である。しかし、それ以外の語りくちのなかには両者が共通する要素はなく、出口の共用が本来的なものではないということを証明している。

「カタス／堅州」はカタスミ（片髓）ともカタス（堅い砂）とも決めかねるが、この語の中心は「根」にある（ゆえに日本書紀は根国という呼称を用いる）。その「根」は根源を意味し、ゆえに「妣国」という別称をもつ。「妣」は死んだ母を意味する漢字だが、この漢字を用いた真意は母なる存在としての原郷性にあるとみるべきだ。古事記のササノヲは、イザナキに追放されてさまよつた末に根堅州国をうしはく神になつたと語られているが、それは起源神話（由来譚）の語りくちであり、ササノヲはもともと根堅州国をうしはく神として存在した。その鎮座の由来を追放として語るのがササノヲの遍歴物語なのである（三浦「出雲神話論」一七五—一八一頁）。そもそも、イザナキから「海原を知らせ」と命じられたところに、ササノヲと根堅州国との関係は窺えるのではないか。

古事記に描かれた根堅州国は、木の俣から根を通つて地中に入ると、突然視界が開けて根堅州国に着いたとしか語られず、帰り道の黄泉比良坂をのちの結合とみると、葦原中国との位置関係ははつきりしない。またオホナムチ（大穴牟遲命）が到着した先で目にした

風景は、家があり野原があり草木が茂り、ヘビやムカデやネズミがおり、草原が広がっているばかりだが、「大祓」祝詞を読むと、もう少しイメージを膨らませることができるといえる。この祝詞は、地上に生じたあらゆる罪を集めて祓いやる際に唱えられるが、地上のすべての罪は次のような手順で流され消滅させられるという。

高い山や低い山の末からなだれ落ちるように激しく流れる速い川の瀬にいますセオリツヒメ（瀬織津比咩）という神が、大海原に持ち出だしてくるだろう。そのように持ち出ると、荒々しい潮目の八百道がぶつかると八百道にいますハヤアキツヒメ（速開都比咩）という神が、持つてがぶがぶと呑んでしまおう。このように呑んだらば、風が吹きだす気吹戸にいますイブキドヌシ（気吹戸主）という神が、根国・底之國に気吹き放つてしまおう。このように気吹き放つたならば、根国・底之國にいますハヤサスラヒメ（速佐須良比咩）という神が、持ちさすらつて失くしてしまおう。

罪や穢れは川に流してしまえば浄化されるという日本人の発想がよく表れた祝詞だが、底之國と対表現になっている根国を重ねることによって、古事記の根堅州国のさまがかなり明瞭に見通せるのではないかと思う。大祓祝詞の神話によれば、根国は川から海の底を抜けた先に存在する世界として描かれており、その在り方はオキナワのニライカナイなどのイメージにつながる。祝詞では罪や穢れだけが集まる汚らわしい世界のようにみえるが、ニライカナイの在り方を重ねると、その穢れは根国で浄化され再生されて地上に還流するという観念に支えられていることもわかるのである。この神話を古事記の根堅州国に重ねてみると、その世界は決して地下や地中の闇黒世界ではないということもはっきりするはずだ。そこは、海の

かなたの水平線の先にある世界として存在する。それが、列島に生きた人びとの古層に埋め込まれた死と生が一つになった世界であるとみなすと、ここに語られた循環的な世界観は理解しやすい。

そこから明るくユートピア的な側面を切り出すと、海のかなたから訪れたスクナビコナ（少名毘古那神）が、いつのまにやら帰っていったという常世国になるらしい。スクナビコナがやってきた場所、つまり母であるカムムスビ（神産巢日命）のいます世界がどことは語られていないが、そこは、帰って行った常世国と同じところであるとみなければならぬ。ただし、出雲の神がみの祖神カムムスビが常世国にいますとは考えられない。常世国というのは不老不死という道教由来の新しいユートピア観が入り込んでいると考えられるからである。その点を考慮すれば、カムムスビは、根堅州国があるいはそこと連接した世界としての海のかなたの原郷にいます祖神（母神的存在）であると考えられる。そのカムムスビが、古事記の冒頭においては、垂直的な世界観が強められ神聖性を強調するために高天原に引き上げられてしまった（『出雲神話論』第三章）。

日本列島の古層の観念として神の世界が水平線のかなたに存在したというのは、根堅州国の在り方からみて明らかである。そして、それと近い観念を持つのが綿津見神之宮と呼ばれる海の底にある神話世界だ。いわゆるウミサチビコ（海幸毘古）とヤマサチビコ（山幸毘古）によって語られる世界だが、この神話がインドネシアなど南方に起源をもつということは早くから知られていた。そして、古事記の神話のなかには南方由来と考えられる神話がいくつも存在することはさまざまに指摘されている。それらは水平的な観念のなかに存在するもので、垂直的な要素をもたない神話である。王権的な

性格をもつ垂直的な世界観は、水平的な世界観に比べると新しいものだとみなすべきだと思われる。その、出自をまったく異にする二つの観念が融合したところに、古事記の神話ではき上がっている。それは当然、日本人の形成という問題と重ねられるというのは疑う余地がない。

そのあたりのことは、すでに早くから文化人類学の研究のなかで、文化複合の問題として指摘されていたことである。その先駆けは、一九五〇年代に発表された岡正雄による一連の論文だが（『異人その他』所収）、たとえば次のように岡は言う（引用は、大林太良編の岩波文庫による）。

神出現の表象に、著しく対照的な二つの型、すなわち、神の出現を、(一)垂直的に表象するものと、(二)水平的に表象するものと、との二つの形態がある。(一)の形態では、神は天上にあり、人間界への出現は降臨の形をとり、(略)(二)の形態は、神は地の国あるいは地下界にあり、彼方・彼岸から村々に訪れてくるという水平的出現表象である。(九頁)

要するに日本固有文化は、南中国、江南地域、インドネシア方面から渡来したいくつかの農耕文化の分厚い地盤の上に、支配者文化が被覆してき上がった混合文化であるといつてよい。(六四頁)

渡来の時代、農耕文化に基層をみる点、それぞれの神話の分析など個々の部分に関しては修正すべきところがいくつもあると考えるが、大きな枠組みとしては妥当な見解として受け入れられる。そして、こうした文化複合の問題は、形質人類学者の植原和郎が提起した日本人の起源に関する「二重構造モデル」と接近しており（『日本人の誕生』）、近年では遺伝子研究のめざましい成果などと相俟つ

てさまざまに研究は深められている。この先それほど遠くない将来、古事記における水平的世界観と垂直的世界観の混在構造がよって来たる道筋なども解明されていくのではないかと期待している。そのあたりに関する神話研究の側からの見通しについては、『出雲神話論』の各所で述べている。読んでいただけたらうれしい。

【引用文献】

- 岡正雄『異人その他 日本民族の文化の源流と日本国家の形成』言叢社、一九七九年
 大林太良編『岡正雄論文集 異人その他 他十二篇』岩波文庫、一九九四年
 倉野憲司『古事記全註釈』第二卷、三省堂、一九七四年
 神野志隆光『古事記の世界観』吉川弘文館、一九八六年
 神野志隆光・山口佳紀校注・訳『新編日本古典文学全集 古事記』小学館、一九九七年
 古事記学会編『校本古事記』続群書類完成会、一九六五年
 西郷信綱『古事記の世界』岩波新書、一九六七年
 西郷信綱『黄泉の国と根の国』『古代人と夢』平凡社、一九七二年
 佐藤正英『古事記と王家の系譜学』笠間書院、二〇〇五年
 九月)

多田一臣『古事記私解』I、花鳥社、二〇二〇年
 植原和郎『日本人の誕生 人類はるかなる旅』吉川弘文館、一九九六年

三浦佑之『黄泉国と根国——死後世界の構造——』『古代文学』十五号、一九七六年三月
 三浦佑之『出雲神話論』講談社、二〇一九年

(みうら・すけゆき／古代文学・伝承文学研究)

Fifty Years after the Theory of "Overground Yomi-no-kuni":
How Should the Land of the Dead Be Interpreted Now?

Sukeyuki Miura

In 1982 a new theory about "Yomi-no-kuni" was advanced that it lies not underground but overground because in his visit to the land of the dead Izanaki reached "sakamoto" or the foothills. After making it clear why the theory made out of a trifling misreading has come to be accepted, this paper considers a more methodological way of interpreting the myth on the basis of the previous studies of ancient literature. In so doing I will also suggest how to read the mythical world of *Kojiki*.

Inside and Outside of "Manyō" Songs:
The Points and Lines of the Literary Sphere of Dazaifu

Makoto Ueno

The aim of this article is to introduce my own research on *Manyō-shū* while over-viewing the fifty-year achievements of its studies. In my research I focus on the literary sphere of Dazaifu to consider how the inside and the outside of literature can be negotiated. Although the importance of interdisciplinary studies has been long advocated, what is really important is what academic contributions they can make. To demonstrate it here I will delineate how I am pursuing my research on the literary sphere of Dazaifu with the help of history, archeology, and historical geography.

Yesterday and Today of Ancient Literature Studies:
What Is Its Erroneous Turning Point?

Osamu Hirota

Is the postwar history of ancient literature studies really that of progress and development? While the field has been increasingly specialized and subdivided, it cannot help but be faced with unprecedented difficulties in the age of information technology. No wonder if it will become totally closed or obsolete. In such a critical situation one of the most imperative tasks is negotiations between oral literature and written literature. The Japanese Literature Association must play an important role in addressing this cross-disciplinary agenda.

Special Issue: These Fifty Years of Ancient Literature Studies

- * Fifty Years after the Theory of "Overground Yomi-no-kuni":
How Should the Land of the Dead Be Interpreted Now? Sukeyuki Miura
- * Inside and Outside of "Manyō" Songs:
The Points and Lines of the Literary Sphere of Dazaifu Makoto Ueno
- * Yesterday and Today of Ancient Literature Studies:
What Is Its Erroneous Turning Point? Osamu Hirota
- * To Think about the Factor X of *Genji-monogatari* in the Coronavirus Crisis Toru Andō
- The Meridian:
110 Years after Hiroshi and Akiko Yosano's Travel to Paris
and Other European Cities Akio Kannotō
- Reading:
Reading the Chapter Titles of *Kōshoku-ichidai-otoko* Takeshi Kurebayashi
- Reviews:
Tomotaka Kubo, *A Study of Murasaki-Shikibu-nikki* Setsuko Ikeda
Chieko Suzuki, *Nothing to Worry about "Renku" Linked Verse* Eri Nagata
Mariko Shimizu, *Hiroko Katayama's Tanka Poetry:
Her Poetical Interactions with Ryūnosuke Akutagawa* Ichirō Itō
Junko Kunori, *Yūji Kinoshita, a Poet* Yuka Shimooka

後記

◆今月号は「古代文学研究——この半世紀を問う」をテーマとする特集号である。この半世紀、古代文学研究は何を為してきたのか、忌憚なく問い直し、今後を見定める原稿をお寄せ頂いたという呼び掛けに、現在までこの研究状況の問題点を鋭く突く示唆を富んだ論考が寄せられた。事前に打ち合わせたわけでもないのに、各論考の指摘する問題点がほぼ一致することに驚いた。強者の意見に迎合し異説を排除・黙殺する学界、従来の固定化された枠組みや方法に盲従する閉塞的な研究状況、外部の情報や質的低下など、半世紀を経た方向へと進んだ研究史、それに伴う研究の細分化や質的低下など、半世紀し、自分自身も加担しているかもしれないと思うと背筋が寒くなる。しかし、この研究状況を打開し、今後の文学研究を切り拓く方法も各論考によって提示された。グローバル化が進む現在、文学研究も同様外部へと開かれる目と従来の枠組みを乗り越える勇氣を持ちながら、自己の研究を深化させる必要があるという主張だと受け止めた。再び緊急事態宣言が発出されるようなコロナ禍のなか、古代文学研究の未来への道筋を示す論考をお寄せいただいた皆様は心より御礼申し上げたい。

◆本号には、日本古代文学研究におけるこの五〇年を振り返り、未来に向けて研究の可能性を拓こうとする論考四本が掲載されている。三浦祐之論は主流の研究法や定説・通説にとらわれる危険を指摘し、上野誠論は近接諸学の研究を取り入れ文学研究を文化領域へと広げること提唱する。また廣田収論は口承と書承とを繋ぐ研究の、豊かな可能性を説いている。

◆隣接諸学の積極的関わりを推奨する点で共通している。そしてそうした懸念や示唆は、安藤徹論が引用するように、一九七〇年代にすでにパフチンが指摘していたものであった。つまり私たちは、五〇年前の文学研究においてすでに憂慮されていた世界的課題を、いまだ越えることができないのである。安藤論はこうした現状を踏まえ、知の発見・想像への飛躍を可能とする「かまへの大きい仮説」こそが未来を拓くとし、それを生み出すためにも、隣接諸学や外来理論といった研究の多様性を歓迎すべきなのだ、論理的に説明している。

◆現在、アメリカ合衆国では分断の深まりが危惧されているものの、時代的潮流は多様性のある方向にあるといえるだろう。文学研究にもまた、多様性を信じ、大胆に飛翔する力強さがいっそう必要とされている。自分の興味や感覚を信じ、あらゆるジャンルに自由にアクセスし、大きなスケールでオリジナリティを描き出していく——そうした研究が待ち望まれているように。

(西本)